慈愛の人　瓜生岩子

厳しく貧しい時代
わが身をけずって人のために生きた女性

少女時代

父の急死、そして火事

瓜生岩子は、江戸時代の文政12年（1829年）に生まれました。岩子の父は喜多方の小田付で油屋を営んでいて岩子は恵まれた家庭ですくすくと育ちました。しかし9才の時、次々と不幸が起こります。父が肺炎で急死、そのあとすぐ火事で家が全焼。岩子は弟と一緒に母の実家である熱塩村の温泉宿・山形屋に引き取られて暮らすことになりました。山形屋の近くには示現寺というお寺があり、境内で遊んだりお坊さんに読み書きを習ったりして過ごしました。

14才になって、医者である会津若松の叔父の家に、一人で行儀見習いに出ました。その頃の会津地方は厳しい年貢の取り立てや飢饉で人々が苦しんでいた時代でした。ここで診療の手伝いをしながら貧しさや病気で苦しむ人の姿を見たことが、岩子が将来行う活動のきっかけになったと言われています。

結婚

愛する人達との別れ

岩子は17才で結婚し夫婦で呉服屋を始めました。子どもも産まれ幸せに暮らしていましたが、また不幸がおそいます。夫が病気で倒れ、岩子が一人で看護、商売、育児、家事をこなしていましたが、医者の叔父、夫、岩子の母と次々に愛する人達が亡くなってしまいました。岩子は悲しみに打ちひしがれ生きる気力もなくなりました。店を閉じ、4人の子どもを奉公先などへ預け、生まれ故郷へ戻ってきました。そこで小さい頃通った示現寺のお坊さんに諭されるのです。

「世の中にはお前以上に不幸せな人が大勢いる。これからは困っている人の世話をして生きていきなさい」と。それからの岩子は、困り事の相談や捨て子の面倒を見て毎日を送るようになりました。

社会福祉の日々

岩子の名声は日本中へ

岩子は43才の時、「救養会所」という東京の福祉施設でおよそ1年間見習いとして働きながら、施設の運営方法を学びました。その後喜多方へ戻り、小田付幼学校の場所を長福寺に移して、女の人に針仕事を教える裁縫教授所を作りました。

岩子の熱心な活動は、国や町の有力者にも知れ渡りました。当時の福島県知事が福島市で活動をしないかと岩子にすすめ、岩子は福島市でも困っている人のために働き始めました。63才の時には、明治時代の有名な実業家・渋沢栄一※3から渋沢自身が院長をしている東京養育院での世話役を頼まれ半年ほど勤めました。同じ頃、岩子は女性で初めて国会に「婦人慈善記章の制」を設けて欲しいという請願書を出しました。しかし残念ながら採用はされませんでした。

活動の始まり

敵味方の区別なく困っている人を助けた

戊辰戦争が始まりました。会津にも敵軍が攻め入り、町は焼け野原、けが人であふれていました。岩子はいても立ってもいられず戦いの中心地・会津若松へ向かい、空き家を収容所代わりにして敵味方関係なく傷の手当てをしました。クリミア戦争でのナイチンゲール※1と同じ行いです。これは敵軍の大将である板垣退助※2の心をもも感動させたと言われています。

会津藩が負けて戦争は終わりました。村々に預けられたさむらいの子ども達の悪さが目にあまるようになりました。岩子はこの子ども達を集めて教育をしてやりたいと思いました。そして何度も何度も役所に通って許可をもらい、自分の家財道具を売ったお金で喜多方に「小田付幼学校」を建てました。

晩年

一生涯を人々のために

その後も岩子は活動を続けます。会津若松、会津坂下などに育児会、喜多方には産婆研究所を作り、各地で講習会も開きました。この講習会には、野口英世※4の母シカも参加し産婆の免許を取ったと言われています。会津若松にはお金がなくて医者に行けない人のための私立病院も建てました。

明治27年日清戦争が始まりました。包帯の切りくずで布を織って兵士の家族に配ったり、戦傷病院に水飴を贈ったり岩子の働きは休むことなく続きました。

しかし岩子も69才、働きづめがたたって病気になりました。病床には皇后様からもお見舞いが届いたそうです。そしてとうとう岩子は亡くなりました。

人生のすべてを人のために捧げた岩子。死後7つもの銅像が建てられたのは、そのすぐれた行いをたたえられたものと言えるでしょう。

悲しいね。
せっかく赤ちゃんが
生まれても食べ物が
なくて育てられない
時代だったのよ

※1　ナイチンゲール：イギリスの看護婦。クリミア戦争の時、傷病兵を献身的に看護した。
※2　板垣退助：幕末の土佐藩士、政治家。自由民権運動の指導者。
※3　渋沢栄一：幕末の幕臣、明治～大正初期の大蔵官僚、実業家。
※4　野口英世：福島県猪苗代町出身。世界的な細菌学者。

瓜生岩子の一生

1829年	文政12年	●岩子誕生
1837年	天保8年	9才 ●父急死、火災で家が焼ける。母と弟の3人で、熱塩の母の実家山形屋に身を寄せる
1842年	天保13年	14才 ●医者である叔父のもとに見習いに行く
1845年	弘化2年	17才 ●佐瀬茂助と結婚、呉服商「松葉屋」を営む
1848年	嘉永1年	20才 ●長女つね生まれる。翌々年、祐三生まれ、更にとよ、とめと4人の子どもをもうける
1856年	安政3年	28才 ●叔父死去
1858年	安政5年	**安政の大獄**
1862年	文久2年	34才 ●夫死去（40歳）、子ども4人は奉公先へ
1863年	文久3年	35才 ●母死去
1864年	元治1年	36才 ●店を閉じ喜多方に転居
1867年	慶応3年	**大政奉還**
1868年	慶応4年	40才 ●戊辰戦争が始まり、会津若松で戦傷者の手当てをする
1869年	明治2年	41才 ●「小田付幼学校」を建てる
1871年	明治4年	43才 ●幼学校を閉じ、東京・深川の救養会所に学ぶ
1872年	明治5年	44才 ●小田付に救養会所会津支部の設立に奔走する ●自宅で裁縫・機織りを教え、困っている人の面倒を見る
1879年	明治12年	51才 ●長福寺で裁縫教授所をひらく
1887年	明治20年	59才 ●福島県知事の勧めで福島長楽寺門前に転居。各郡に教育会の設立をうながし、堕胎・棄児の防止を説く
1888年	明治21年	60才 ●水飴の作り方、飴粕の利用法を県下で教える
1889年	明治22年	61才 ●福島救育所の設立が認可される
1889年	明治22年	**大日本帝国憲法発布**
1891年	明治24年	63才 ●国会に女性で初めて請願書を提出する ●東京養育院幼童世話係長となる ●会津若松に育児会できる ●喜多方に産婆研究所を設立する
1892年	明治25年	64才 ●福島に「瓜生会」を結成する ●喜多方・会津坂下に育児会できる
1893年	明治26年	65才 ●「福島鳳鳴会」（児童養護施設福島愛育園の前身）設立 ●会津若松に私立済生病院を設置
1894年	明治27年	**日清戦争始まる**
1894年	明治27年	66才 ●東京下谷に「福島瓜生会支部水飴伝習所」を設立する ●日清戦争の傷病兵救護として水飴30貫を寄贈
1896年	明治29年	68才 ●藍綬褒章を受ける ●三陸津波被災者のためのバザーや募金を行なう
1897年	明治30年	69才 ●福島で過労のため病に倒れ、4月19日生涯を終える ●熱塩の示現寺に葬られる

福島愛育園にある岩子の銅像